

幼稚園児と保育園児の体力差に関する基礎的資料

Basic data on physical strength difference between kindergarten
and nursery school children

環太平洋大学短期大学部人間発達学科
十河 直太
SOGO, Naota
IPU Women's College
Department of Human Development

環太平洋大学短期大学部人間発達学科
仙波 慎平
SEMBA, Sinpei
IPU Women's College
Department of Human Development

体育学部体育学科
浅野 幹也
ASANO, Mikiya
Department of Physical Education
Faculty of Physical Education

要旨：幼稚園と保育園に通う園児の体力差に関する報告はこれまで多くの研究者によってなされているが、調査の方法や地域性などの理由もあり結論は得られていない。本研究は同じ敷地内の保育園と幼稚園に通う園児の体力差についてMKS幼児運動能力検査を用いた体力測定の結果から検証することによって、幼稚園児と保育園児の体力差についての基礎資料を提供することを目的とした。その結果、年齢区分、性別にかかわらず保育園児が幼稚園児よりも優れた結果を示し、保育園児の方が高い運動能力を身につけていることが明らかとなった。今後、本研究結果に至った要因を深く探る必要があり、保護者への聞き取り調査や園児に対する活動調査を実施することが検討課題である。

キーワード：幼稚園，保育園，幼児，体力差，運動能力

I. 諸言

筆者はこれまで幼児を対象とした体力測定を行うことによって幼児の発育発達過程と運動能力の関係について縦断的に検証を行ってきた。幼稚園もしくは保育園に通う幼児に対し、体力測定を実施してきた中で、筆者はかねてより感覚的に幼稚園児と保育園児の間に体力差を感じていた。具体的には、体力測定項目の中の体支持持続時間や25m走などの種目において、保育園児の方が幼稚園児よりも全体的に優れているのではないかと疑念を抱いていた。同様の意見が測定を行った学生や教員からも寄せられていた。

先行研究を調べてみると、既に研究者によっていくつかの報告がなされていた。杉原らによると保育園児は幼稚園児よりも運動能力が高く、特に立ち幅跳びと体支持持続時間はほとんどの年齢段階において保育園児の方が優れていたことを報告している。一方、鈴木らによると同一地域に住む幼稚園児と保育園児の運動

能力を比較したところ、幼稚園児と保育園児の間に有意な差は認められず、保育形態の差異によって運動能力に影響は及ぼさないことを示唆している。近年の報告では、森らの研究グループは全国の幼稚園、保育園の幼児に対し運動能力検査を実施し、様々な視点から子どもの発育発達に関する検証を行い継続的に報告している。2011年の報告では、男児、女児ともに6種目の合計点で幼稚園の方が有意に優れた結果を示した。一方、2018年の報告によると幼稚園、保育園、こども園の幼児の測定結果を比較したところ、各種測定項目において各園の間に有意な差は認められなかったとしている。このように同一の研究グループにおける大規模な縦断的研究であっても一貫した研究結果は得られていないことがわかる。また、村瀬らは、運動能力と幼稚園の比較は1970年代から1980年代にその多くが報告されているが、今日の幼児の体力を正確に把握するためには同様の観点による追従研究が必要であることを述べている。

表 1. 対象児の身体的特徴

身体的特徴	5歳児				4歳児			
	男児		女児		男児		女児	
	幼稚園 (n=14)	保育園 (n=16)	幼稚園 (n=10)	保育園 (n=10)	幼稚園 (n=12)	保育園 (n=21)	幼稚園 (n=9)	保育園 (n=11)
身長 (cm)	109.6 ± 4.5	111.7 ± 3.3	109.6 ± 4.5	111.7 ± 3.3	102.1 ± 4.5	100.5 ± 4.2	102.8 ± 4.4	101.6 ± 3.4
体重 (kg)	18.0 ± 1.4	19.0 ± 2.3	18.7 ± 2.7	17.2 ± 1.6	16.0 ± 1.4	15.7 ± 1.7	15.8 ± 1.4	16.1 ± 0.7

平均値 ± 標準偏差

幼稚園と保育園は主管や制度が異なる機関ではあるが、同年代の子どもたちを預かり育むという点においては同じである。幼児期運動指針で掲げられているとおり、幼児期において身体活動を十分に行うことは、生涯にわたって健康を維持し、豊かな人生を送るための基盤づくりとなる。しかしながら先に述べたように、幼稚園と保育園といった異なる機関での経験が運動能力に及ぼす影響については30年前から今まで結論に至ることはないものの、保育者や研究者、子育て世代の親は保育園児の方が幼稚園児よりも運動能力が優れていることを肌で感じている。このように、研究者による報告では一貫した結論が得られていない一方で、世間では保育園児の方が幼稚園児よりも運動能力が優れているというように認識されており、両者との間に矛盾が生じている。

これらのことをふまえ、本研究では筆者の所属先と同系列の幼稚園もしくは保育園に通う幼児に対し体力測定を行った結果を検証することによって、改めて幼稚園児と保育園児の体力差について明らかにすることを目的とする。

II. 方法

1) 被験者

被験者はE県U市にあるK幼稚園及びG保育園に通

う幼児103名（男児63名，女児40名）を対象とした。各園の被験者に関する身体的特徴は表1の通りである。

2) 測定項目

本研究で行った体力測定は、森らが提唱したMKS運動能力検査に基づいて実施した。測定項目は体支持持続時間，両足連続跳び越し，捕球，25m走，立ち幅跳び，テニスボール投げとした。

3) データ処理

データはすべて平均値 ± 標準偏差で示した。統計処理はPASW Statistics 18を用いた。幼稚園児と保育園児の比較については対応のない t 検定を行い，5%未満を有意水準とした。

III. 結果

幼稚園児と保育園児の体力測定の数値を比較した結果について表2に示した。

5歳児を比較した結果，男児では体支持持続時間，立ち幅跳びにおいて保育園児が幼稚園児よりも有意に高い値を示し，両足連続跳び越し，25m走については有意に高い値を示した。女児においても体支持持続時間，立ち幅跳びにおいて保育園児が有意に高く，25m走は有意に低い値を示した。すなわち，これらの種目において保育園児は幼稚園児よりも優れた運動能力を

表 2. 保育形態，性別，年齢別にみた体力測定結果

体力測定項目	5歳児				4歳児			
	男児		女児		男児		女児	
	幼稚園 (n=14)	保育園 (n=16)	幼稚園 (n=10)	保育園 (n=10)	幼稚園 (n=12)	保育園 (n=21)	幼稚園 (n=9)	保育園 (n=11)
体支持持続時間 (秒)	24.0 ± 13.4	63.0 ± 37.8**	32.0 ± 18.3	67.7 ± 39.1*	13.4 ± 9.6	44.2 ± 36.7**	24.7 ± 15.0	43.0 ± 17.3*
両足連続跳び越し (秒)	5.6 ± 1.2	4.8 ± 0.8*	5.9 ± 2.1	4.9 ± 0.6	5.6 ± 1.1	5.9 ± 1.0	6.5 ± 1.3	5.8 ± 1.0
捕球 (回)	7.1 ± 2.2	7.4 ± 1.8	5.7 ± 1.5	7.0 ± 2.4	6.8 ± 2.7	8.6 ± 1.7*	7.3 ± 1.9	7.2 ± 2.7
25m走 (秒)	7.1 ± 0.8	6.1 ± 0.5***	7.1 ± 0.9	6.2 ± 0.6*	7.5 ± 0.8	7.3 ± 0.7	7.8 ± 0.6	7.1 ± 0.7*
立ち幅跳び (cm)	92.1 ± 14.8	110.0 ± 13.7**	86.0 ± 14.3	100.0 ± 11.5*	95.0 ± 14.5	95.7 ± 13.3	80.0 ± 15.0	103.6 ± 15.0**
テニスボール投げ (m)	5.5 ± 2.0	6.1 ± 1.9	4.5 ± 1.0	4.7 ± 1.7	5.4 ± 2.5	5.5 ± 1.5	3.6 ± 0.5	4.4 ± 0.8*

平均値 ± 標準偏差, *P<0.05, **P<0.01, ***P<0.001; vs幼稚園

持つことが示唆された。

同様に4歳児を比較した結果、男児では体支持持続時間と捕球において有意に高く、保育園児の方が優れていた。女児を比較した結果、保育園児が幼稚園児よりも体支持持続時間、立ち幅跳び、テニスボール投げにおいて有意に高く、25m走は有意に低い値を示し、保育園児の方が優れた結果を示した。

IV. 考察

本研究は保育園児と幼稚園児の体力差について、MKS幼児運動能力検査を用いた体力測定の結果から検証することを目的とした。その結果、年齢区分、性別にかかわらず保育園児が幼稚園児よりも優れた結果を示し、保育園児の方が高い運動能力を身につけていることが明らかとなった。

諸言で紹介したとおり、保育園と幼稚園に通う幼児の体力差に関する研究はこれまでいくつかなされているがその結果に一貫性はない。しかしながら、研究者による結論が得られていないにもかかわらず、インターネットでの口コミサイトや、幼い子を持つ親から直接的に聞く話では「幼稚園児よりも保育園児の方がたくましい。」「保育園に通う子どもの方が活発だ。」という意見が散見される。このように研究者の検証結果と一般的な考え方の矛盾を払拭するため本研究を遂行するに至った。

本研究の対象となった園は、筆者の所属する短期大学と同敷地内に設置されている同系列の附属幼稚園と保育園である。どちらの園も子どもたちの体力づくりに力を入れており、かけっこや逆立ち歩き、体操などの運動を教育時間ならびに保育時間に行っている。本研究の結果において保育園児の方が優れた運動能力を示した要因については、保育時間・運動指導者の指導力・保育中の身体活動量などの違いが影響を与えた可能性が考えられるが、これについては今後アンケート調査や活動量調査を行うことによって検証する必要がある。

本研究は4歳児および5歳児のみを比較対象とした。3歳児を除外した理由については、幼稚園児の入園は3歳に至ってからであり、入園してから測定日まで2か月程度しかなかったためである。また、本研究では2018年度の幼児に対する体力測定のデータのみ検証を行ったが、系列園への体力測定は例年行っているため、蓄積したこれまでのデータについては、今後検証を行う必要がある。

本研究では保育園児が幼稚園児よりも運動能力が優れていることを示唆する結果となった。しかし、本研究結果は2園の比較に限定したものである。今後、対象となる園や児童数を増やすことやアンケートの実施など見直しを図り、他の視点から本目的を再検証する必要がある。

最後に、少し飛躍した考えであるかもしれないが、仮に保育園の方が幼稚園よりも運動能力を高める要因を多く含むことが事実であるとするならば、入園を控える子どもを持つ親の園選択に影響を与える可能性も否定できない。さらに幼稚園児と保育園児の体力差について一貫した研究結果を示すことは、将来的な幼児期における運動指針にも影響を及ぼす可能性を孕んでおり、幼児の発育発達学に携わる研究者の継続的な追求が必要であろう。

V. 参考文献

- MKS幼児運動能力検査, 幼児運動能力研究会,
<<http://youji-undou.nifs-k.ac.jp>> 2018年11月29日アクセス
- 村瀬智彦, 出村慎一 (2005) 幼児の体力・運動能力に関する測定評価研究の課題－国内の先行研究の整理と今後の検討課題, 体育測定評価研究 5号, 5-13.
- 森司朗 (2011) 幼児の運動能力における時代推移と発達促進のための実践的介入, 平成20～22年度文部科学省科学研究費補助金(基盤研究B)研究成果報告書
- 森司朗 (2018) 幼児の運動能力の現状と運動発達促進のための運動指導及び家庭環境に関する研究, 平成27～29年度文部科学省科学研究費補助金(基盤研究B)研究成果報告書
- 杉原隆, 松田岩男, 近藤充夫 (1987), 幼児の運動能力(3)－各種目の分布と幼稚園・保育所の比較－, 体育の科学, 37号, 698-701.
- 鈴木順和, 原崎正司 (1992) 幼児の運動能力に関する研究(Ⅱ): 同一地域における幼稚園児と保育園児の比較, 宮崎女子短期大学紀要 18号, 41-59.
- 幼児期運動指針ガイドブック (2012), 文部科学省